※ ばかされた狐

昔、ばくろうがいた。その頃矢づか野に狐がおり人をだましたため、ばくろうは狐をやっつけてやろうと思い、矢づか野に出かけた。

おれはばくろうだが、鞭があるから馬にばけてくれれば、てんぷらでもまんじゅうでもたくさんたべさせるからといったら、狐は承諾した。

鞭の白狐を馬にしてでかけた。あまりいい馬なので、お客がたくさんついた。一人のばくろうが高い金を出して買うことになった。

その時狐は、手綱はうらないでくれといったが、ばくろうは、この馬はくせがわるいから、ちゃんと結びつけ、たべものは酒がすなどを与えてくれといい売って帰った。

狐はにげようにもにげられず、だんだんやせていった。買ったばくろうは困り運動不足かと外に出して、足などをさすってやると、狐はこのときとばかり逃げだした。ばくろうは逃がしてはならずと追ってきた。沢の道に来たとき、狐は目のみえないぼさま（坊さん）になって、道をもどって来た。ばくろうは、ぼさま、ぼさま、馬を見なかったかと聞いたら、もう少しでけられるところだった。もう馬なら上淀川についたころだといった。

狐は約束の通りばくろうの家にいったら、表も裏も戸をしめてあって入られなかった。

狐はその後人をだまさなくなったという。